ヒサエ・ヤマモトの“A Fire in Fontana”における人種差別と‘Fear of Responsibility’

長　井　志　保＊

（平成23年 6 月14日受付，平成23年12月 8 日受理）

Racial Discrimination and ‘Fear of Responsibility’ in Hisaye Yamamoto’s “A Fire in Fontana”

NAGAI Shiho ＊

In this paper, I will examine Yamamoto’s thoughts and reactions on racial discrimination by studying her works, interviews and chronology. First, I will review the characteristics of Nisei women’s autobiographies to appreciate the uniqueness of Yamamoto’s works. Second, I will explore her work, “A Fire in Fontana,” to see how the Nisei woman expresses her internal self when she is involved with racial discrimination. Third, I will explain Yamamoto’s ‘fear of responsibility.’ Yamamoto put to practice the precepts of the Sermon on the Mount, reflecting on her life. To do so, she tried to overcome her anxiety toward racial discrimination. However, the angst grew into ‘fear of responsibility’ and then mental illness. In this sense, ‘fear of responsibility’ refers to Yamamoto’s long years of mental suffering described in “A Fire in Fontana.”

Key words: Japanese American literature, Japanese American Nisei woman writer, autobiography

はしがき

ヒサエ・ヤマモト (Hisaye Yamamoto) は第二次大戦後の反日感情の収まらないアメリカで高く評価された日系アメリカ人短編作家であり，その作品についてはこれまで多くの研究がなされている。ヤマモトの作品は数度にわたりMartha Foleyの“Distinctive Short Stories”年度別目録に掲載されたが，その中で“Yoneko’s Earthquake”はBest American Short Stories:1952に選ばれた。またヤマモトは，文学活動奨励金であるJohn Hay Whitney Foundation Opportunity Fellowship (1950-1951) を受け，文学的功績を称えるBefore Columbus財団の1986 American Book Award for Lifetime Achievementも受賞している。

ヤマモトが作品で取り上げるテーマは，一世の両親と二世の子供たちとの不安定な関係，新世界での一世，特に日系アメリカ人女性の困難な適応状況，日系人強制収容所そして人種差別問題等幅広い領域に達している。ヤマモト作品の多くは，ヤマモトの経験や見聞した出来事と密接に関連しているという点で自伝的な趣がある。しかし，ヤマモトの作品は自己の内省的な考察を描出するという点で, 他の二世作家の自伝とは異なったものとなっている。

ヤマモトは1945年から 3 年間にわたって，アフリカ系アメリカ人週刊紙ロサンゼルス・トリビューン (The *Los Angeles Tribune*) で記者として働いた。その経験をもとに，“A Fire in Fontana”と題した作品を1985年に発表した。人種差別の事例が写実的に描かれているこの作品には，ヤマモトの怒りと，人種差別という不正に対して何もできない自己に対する激しい焦燥感が描かれている。人種差別はヤマモトの作品の多くで取り上げられており，ヤマモトにとって重大なテーマの一つである。ヤマモトは努めて人間の複雑さを描いており，善人，悪人と明白に区別されるような人物を登場させることはない。人種差別問題を描く際にも，白人がもつ人種偏見と共に,アフリカ系アメリカ人，日系アメリカ人その他のアジア系アメリカ人の人種偏見をも指摘する。

ヤマモトはアフリカ系アメリカ人週刊紙の記者としての体験から,アフリカ系アメリカ人に対する差別の根深さを認識するが，“A Fire in Fontana”では, 語り手の心中で人種差別問題が看過できないものとなってゆく様子が描かれる。語り手は, ある人種偏見の憎しみに基づいた犯罪を契機に，人種差別問題をめぐる社会的そして個人的な責任のあり方に苦悩して新聞社を辞める。人種差別に対して嫌悪を抱き，心を痛め，責任を感じる態度の根底には，社会の中で周縁化された人々に対するヤマモトの深

＊ 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生（Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education）

い理解と共感が存在する。

1960年代に, ヤマモトは精神の病を患う。医師はヤマモトの病名は“anxiety”[9]であり, その原因を‘fear of responsibility’つまり「責任への恐怖症」であると診断する。本稿では“A Fire in Fontana”において描かれる人種差別問題に対して中心人物が抱く責任感と焦燥感を，ヤマモトの別の作品“Eucalyptus”の中で語られる‘fear of responsibility’と関連づけて解釈を試みる。

本研究では, 文学テクストを素材に, アメリカで生きる日系人の社会的・心理的苦闘を跡づける。従来の異文化理解教育においては, 文化の多様性や異文化の魅力に焦点が当てられてきたきらいがある。しかし, これは異文化理解の一側面でしかない。本稿は, 異文化に生きるマイノリティの苦悩や葛藤を, 異文化理解教育において疑似体験することの可能性を探る基礎研究となる。この成果が, 異文化理解の授業実践に生かされるならば, 生徒は異文化を体験的に知ることができる。また, 生徒は日系人の文化を通して, 自文化である日本文化をも再考するきっかけを得ると期待される。

1．日系アメリカ人二世女性作家

日系アメリカ人の文学とは，移民として渡米した日本人である一世と,その子孫である二世，三世，四世•••が書いた作品のことである。日本からの移民は19世紀末に始まり，その後次第に日系アメリカ人社会が形成されてゆく。これらの移民の大半が農業に就労し，農業は日系社会の基盤となる。1940年頃には，カリフォルニア州の市場向け野菜の半数弱を日系人農家が占めることになる。こういった移民一世の多くが，労働の合間を縫って俳句や和歌を日本語で書いた。

1941年12月 7 日の真珠湾攻撃によって，日本とアメリカは全面戦争の状態に突入する。アメリカでの反日感情が次第にヒステリー化していく中で，1942年 2 月にFranklin Roosevelt大統領は，行政命令 (Executive Order) 9066を出す。この命令は, 太平洋沿岸に住むおよそ12万人の日系人を，内陸部の砂漠や山岳地帯にある10 ヶ所の強制収容所 (Internment Camp) に送り込むものであった。日が経つにつれて，収容所内では日英両語による新聞や雑誌が発行されるようになる。これに伴って, 文学活動も盛んになり，二世作家が英語で創作活動を行う契機となる。

戦後は，二世たちが作品を多く発表するようになり，現在は三世，四世作家の時代となっている。また，強制収容によって失われた資産に対する補償をアメリカ市民の権利として要求する運動が，二世と三世によって行われる。この運動に対して，Ronald Reagan大統領は, 1988年に賠償法案 (the Civil Liberties Act of 1988) に署名をすることにより, 正式に謝罪した。その結果，収容された日系人に対して一人当たり 2 万ドルの賠償金が1990年から支払われるようになった。以上のような日系アメリカ人の歩みは, 多くの二世作家によって描かれている。

植木照代によると，二世文学の特徴は，アメリカ社会で日本人の顔をもち，日本的文化の影響を受けることによって生ずるアイデンティティの危機を取りあげていることである[1]。このアメリカ社会は, WASPつまりアングロ・サクソン系の白人でプロテスタント教徒であるアメリカ人の文化への同化を大前提としている。また，二世作家は，日系一世の世代および歴史とのかかわりを描き，特に強制収容という民族集団の歴史的体験を問い直すことによってその不当性を追及している，と植木はいう[1]。この二世文学の特徴は，二世女性作家の自伝にも当てはまる。

Traise Yamamotoは, 二世女性作家の自伝というジャンルの中で最も広く読まれている作品として，Monica Soneの *Nisei Daughter* (1953)[2], Jeanne Wakatsuki Houstonの*Farewell to Manzanar* (1973)[3], Yoshiko Uchidaの*Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family* (1982)[4]を挙げている[5]。この三作品はともに，戦前，戦中，戦後を通して日系アメリカ人家族の“Americanness”への同化や二世のアイデンティティの問題を描いている。

Shirley Geok-lin Limは二世の自伝の特徴について，“Although the autobiographical impulse seeks to express a unique life, almost in contradiction, these life stories repeat a common plot of race difference and conflict with white American hegemony. ”[6]と述べている。第二次世界大戦時の日系人強制収容を体験している二世は，日系アメリカ人がアメリカ社会から受けた取扱いを自伝によって伝えたいという強い動機がある。二世の自伝には，自らが受けた不正な扱いが再発しないようにとの願いが込められている。そのため,抽象的な表現や教訓的な語りがみられ，二世の作品は自伝というよりも，社会的，歴史的な記録資料としての色合いが濃いものとなる[5]。

また，Sidonie Smithによれば，自伝とはそもそも作者が過去を再構築するフィクションであり，それは“a kind of masquerade”である[7]。日系移民一世とその子孫である二世には，元来個人よりも集団を重要視する傾向があり，また二世にはアメリカ社会に“fit in”して人種差別から逃れたいという願望がある。二世は強制収容によって敵国人として周縁化され，“individuality”をも否定された。そこで, 二世作家は白人読者との衝突を避けるために，“congenial flatness”をもった“discursive agency”を描くことになり, 個人の真情を吐露することを差し控える[5]。

こうして，二世は他の自伝作家以上に読者を意識することとなり，より多くの“‘acceptable’terms”を使用しながら自伝を書くという結果に陥る。さらに日系人は強制収容体験によって，個人の主体性の否定にとどまらず，日系人社会全体のアイデンティティをも否定された。

そのため二世は，“I am an American”ではなく“We are Americans”という“collective subjection”によって，つまり集団的な従属性を意味する語彙を使用することによって，日系人の“Americanness”に対する白人の疑いを否定しようと努める[5]。上述の見解から, 二世作家は, 自己の内省的な考察によって自伝を書いたのではないということが示唆される。

日系人強制収容体験が，ヒサエ・ヤマモトにも多大な影響を与えていることは，他の二世作家の場合と同様である。ヤマモトは1976年に“. . . I Still Carry It Around”で，収容体験について“Any extensive literary treatment of the Japanese in this country would be incomplete without some acknowledgment of the camp experience.”[8]と述べている。またヤマモトは，収容体験を語ったドキュメンタリーのテレビ番組を見て，気が付くと泣き叫んでいたというエピソードを語っている[8]。このエピソードはおそらく1970～1974年頃の出来事だと推測される[8]が，約30年間も日系人強制収容という不条理な出来事が，ヤマモトの意識の奥深くに抑圧されたままになっていたことが分かる。

しかしながら，ヤマモトの作品において取り上げられるテーマは，日系人の強制収容体験にとどまることなく，アメリカ国内の様々な人種，ジェンダー，階級による差別や異人種との交渉等に至る。そして，人種を超越した人間の心の深淵を多面的に捉える。前述のとおり二世の自伝作品の多くが, “individuality”[5]を表出せずに，人種差別問題との直接的な対峙を避けている。これとは対照的に，ヤマモトは作品中で, 人種差別に大大的な抗議を試みつつ，それを実行できない二世の葛藤に満ちた精神世界を描く。また同時に，日系人を含むアジア系アメリカ人やアフリカ系アメリカ人による人種差別についても言及する。ヤマモトの短編“A Fire in Fontana”では，アフリカ系アメリカ人差別を目のあたりにした二世の人種差別問題に対する葛藤が描かれている。これらの点でヤマモトの作品は，強制収容体験という共通の題材を観念的に記述するという二世の典型的な自伝とは趣を異にする。Traise Yamamotoが, 二世女性作家の自伝というジャンルの中に, ヒサエ・ヤマモトの作品を取り上げなかったのも上述のような理由によるかもしれない。

しかし, ヤマモト自身，“‘Fire in Fontana’(sic) is based on my employment at the *Los Angeles Tribune,* the weekly newspaper that hired me fresh out of camp.”[9]と語っている。また，村山瑞穂は「自らの経験に基づいたメモワール」[10]と言い，Matthew Elliottは“her 1985 autobiographical account of the era”[11]と述べていることから，“A Fire in Fontana”を自伝的傾向が強い作品であると述べても差し支えないだろう。しかし，“A Fire in Fontana”における語り手である「私」とヤマモトの実際の行動には多少の差異がある。ヤマモトは実際に起こった出来事を自伝のように語りながらも，同時に物語化しているため，この作品はsemi-autobiographicalな作品とも言えるのではないだろうか。

2．“A Fire in Fontana”における人種意識の表れ

ヤマモトは，1921年に南カリフォルニアのレドンド・ビーチで生まれる。熊本県出身の両親は，トマトやイチゴの栽培に従事していた。家族は日本式生活を営み, 日本人以外とのつきあいは，農業の手伝いに来るメキシコ人ぐらいであった。しかし，その周辺にはフランス人，ドイツ人，中国人，アルメニア人など様々な人種が住んでおり，学校ではそうした人々の子供と共に学んだ[1]。

ヤマモトは20歳のときにアリゾナ州ポストン収容所に収容される。そこで，ヤマモトは収容所で発行されていた新聞であるポストン・クロニクル (*Poston Chronicle*)の記者およびコラムニストとして活躍する。戦後1945年から1948年まで，ヤマモトはアフリカ系アメリカ人週刊紙社に勤務し，その後1953年から1955年までボランティアとしてニューヨークのカトリック・ワーカー (Catholic Worker) 更正農場で働いた。この団体は戦時中「良心的兵役拒否者」をかくまった平和主義者が主催するもので，戦後は困窮者に給食サービスや衣料と宿泊の提供，アルコール中毒患者のリハビリなどを行っていた。幼少時から異民族との交流をもつ環境で生活してきた体験からヤマモトの意識は，アメリカ社会の周縁に存在するマイノリティや白人社会の中でも貧困層や心身に特別な支援を要する人々に注がれる。

またヤマモトは自ら，“disease of compulsive reading”[13]にかかったと言い，“her extensive reading of American and European writers”[14]に示されるように, 広く西洋文化や歴史に対する知識を読書からも得たと思われる。民族の違いを越えて人間を観察するヤマモトの姿勢は，この広範囲にわたる読書経験からも窺うことができる。日系人コミュニティを描くことが多い二世の作家の中にあって，ヤマモトは様々な民族の相互交流や衝突の世界を描く。

ヤマモトは人種差別問題への認識の深まりについて以下のように述べる。

> Southern California has always been a melting pot, at least in my experience. I gradually became aware of discrimination and when we Japanese were singled out for mass detention during the war, that really opened my eyes to what prejudice can lead to. And my education on this subject was furthered when I went to work for the *Los Angeles Tribune*.[12]

ヤマモトは日系人が強制収容されたときに, 白人アメリカ人の差別というものが, いかなることを引き起こすのか思い知らされた。そしてアフリカ系アメリカ人新聞社で働

くことになり, 200年以上差別され続けてきたアフリカ系アメリカ人の苦境を肌で感じることとなる。

ここでは主に“A Fire in Fontana”における語りから，人種差別問題における日系アメリカ人二世女性の人種意識を解読したい。

“A Fire in Fontana”は，1985年に羅府新報 (*Rafu Shimpo*) に掲載されたものである。しかし，物語は40年もさかのぼった第二次世界大戦中の出来事から始まる。日系アメリカ人二世の「私」は，シカゴから父のいるアリゾナ州の日系人強制収容所へバスで向かう。その車内で隣に座った白人女性は「私」に親しげに話しかける。南西部に向かう途中，セイント・ルイスに差し掛かったところで，ふたりはアフリカ系アメリカ人に対する人種差別を目撃する。その様子を嬉々として満足気に眺める若い白人女性に対して,「私」は無言のうちに抗議の意を表す。これに対して，白人女性は強い口調で,“Well, it's all in the way you're brought up. I was brought up this way, so that's the way I feel.”[9]と答える。「私」はこの出来事から,“Here I was on a bus going back to the camp in Arizona where my father still lived, and I knew there was a connection between my seatmate's joy and our having been put in that hot and windblown place of barracks.”[9]と，日系人強制収容政策の根底にアフリカ系アメリカ人差別問題と同様の人種差別があると感じる。

その後,「私」はアフリカ系アメリカ人週刊紙社で待望の職を得る。アフリカ系アメリカ人たちと議論する中で,「私」はアフリカ系アメリカ人への人種差別がいかに根深いものであるかを知る。それと同時に，アフリカ系アメリカ人の話題が常に人種であり，その議論が憎悪に満ちた感情的なものであることに辟易する。そこには，望んでアフリカ系アメリカ人の世界に入っても彼ら/彼女らの一方的な独善を是としない「私」の姿がある。しかしまた,「私」はアフリカ系アメリカ人を描写するとき，一人ひとりの肌の色を“a negro who looked absolutely white”[9]や“the color of café-au-lait”[9]のように表現することによって，アフリカ系アメリカ人を一つの集合体として捉えず個々の人間として捉えている。

1945年のある日，アフリカ系アメリカ人であるショート氏が，自分の立場に賛同を得ようと新聞社に駆け込んでくる。彼は人種統合を実践しようと白人地区であるフォンタナへ引っ越したが，周囲から脅迫や嫌がらせを受けているという。これを聞いたアフリカ系アメリカ人編集スタッフのミス・モーテンは，普段は穏やかで良心的であるにもかかわらず,“I hate White people! They're all the same!”[9]と，白人への憎しみを露わにする。しかし，このミス・モーテンの態度に「私」は違和感をもつ。そこで,ある白人司祭がショート一家の受難劇を作り，白人のアフリカ系アメリカ人差別に対する不正を批判したことを「私」は語る。この語りによって，白人は皆同じである,というミス・モーテンの言葉に抗議する。ここでも，白人，アフリカ系アメリカ人という人種を超えた,ヤマモトのhumanityのあり方が示されている。「私」は，ショート氏にあまり肩入れしない語彙である“alleged”,“claimed”という“cautious journalese”を用いて記事を書いた[9]。しかし, ヤマモトが書いた記事が実際にロサンゼルス・トリビューンに掲載された形跡は，村山瑞穂によると確認できないということである[10]。

その後，ショート一家は, 白人による放火が疑われる火事で死亡する。「私」は, ジャーナリストとしての客観性からショート氏の窮状を強く主張する記事を書かなかったことが，ショート一家の死に繋がったのではないか,と後悔する。そして, ショート家族の死を知った「私」の内部にある異変が起きる。

> It was around this time that I felt something happening to me, but I couldn't put my finger on it. It was something like an itch I couldn't locate, or like food not being cooked enough, or something undone which should have been done, or something forgotten which should have been remembered. Anyway, something was unsettling my innards.[9]

しかし, その異変の正体が何であるのか,「私」には明確に認識することができない。

その後「私」はふたりの人物のことを想起する。ひとりは, 戦前にリトル・トーキョーで大声で布教していた日本人福音伝道師である。もうひとりは，よだれを垂らして,身動きの取れない, 身体の不自由な大柄の少年である。「私」は言う。“I should have been an evangelist at Seventh and Broadway, shouting out the name of the Short family and their predicament in Fontana. But I had been as handicapped as the boy in the wheelchair, as helpless.”[9]と。「私」が大声をあげて正義を伝道することができないのは，人種問題に関して確固とした思想が確立していないからだと推測する。ヤマモトは，思想が不確かであることに起因する無力感を, 何もできない車椅子の少年に「私」をたとえることで表現したのである。

「私」は，人種偏見の不正義に対して，キリストの教えを広めるために叫び続ける日本人福音伝道師のようであるべきだったと言う。しかしながら，日本人福音伝道師は大声で叫ぶために顔が紫色になり，その叫びは,“it sounded like the sharp barking of a dog. 'Wan, wan, wan! Wan, wan, wan!' ”[9]と響き渡るという異様さを語る。ここでヤマモトは，正義を広めるのに公衆の面前で叫んではならない (cf.Mat.6:1-8) という聖書の教えと，日本人福音伝道師の熱狂的な布教活動とを暗に対比させていると推察さ

れる。そこには, ジャーナリストとしての外向的な活動からカトリック・ワーカーとして地の塩 (Mat.5:13)となるべく, 内省的な活動へと傾倒してゆくヤマモトの姿が窺われる。

その後「私」は，アフリカ系アメリカ人を侮蔑する用語を使う家族や友人にピューマのように噛みついて疎まれ，文通相手からも, 人種問題に関する意見はあまり積極的に発言するべきではないと忠告される。ここには，人種偏見に拘泥する「私」の姿をみることができる。人種偏見に対して嫌悪を抱き，かつ人種差別に対して抗議しなければいけないという責任感と，それにも関わらず何もできないことに対する不安とが焦燥感となっていく「私」の様子が描かれる。

また，この作品では，Herman Melvilleの*Benito Cereno*における人種問題に関して，Yvor Wintersと「私」が論争していることに触れる場面がある。この論争については, Matthew Elliottが，論文“Sins of Omission: Hisaye Yamamoto's Vision of History”で詳細に検討している。その中でWintersは，アメリカ人船長デラーノが奴隷の現実に意識的に無知であるというよりも，善意をもった者として読んでいる[15]。Wintersの解釈は，無批判にデラーノの言及する歴史の一側面を受け入れて支持する, とElliottは述べる[11]。デラーノ船長は言う。“The past is passed; why moralize upon it? . . . See, yon bright sun has forgotten it all, and the blue sea, and the blue sky”[16]と。このデラーノ船長の思考が, 不正義に対する責任の回避である, とヤマモトは感じたと推量される。この不正義の黙認が語られない奴隷制を作り上げたとも考えられる。デラーノ船長の態度は，日系人強制収容を黙認した善良なアメリカ国民の態度をも想起させる。

ある日,「私」はアフリカ系アメリカ人運転手のバスに乗る。そのバスが白人の運転するバスと小競り合いになったとき，白人運転手の“Why, you Black bastard!”という悪態でその口論は終わる。「私」はこのときミス・モーテンの怒りを自分のものとして理解したと言い，白人運転手に対して怒りを露わにして，彼の行動を管理者に通報したいと感じる。しかし,「私」は“but what could I have said?”と沈黙する。非常な憤りを感じ，この人種差別という不正義に対して何かしなければならない, と「私」は考える。しかしながら,「私」は“Why, you Black bastard!”という白人運転手の言葉に衝撃を受けてすくんでしまい，気分が悪くなる。それと共にどんな行動に訴えたとしても，どうにもならないという無力な自分の現実に暗澹とした気持ちになる[9]。

物語の冒頭では,「私」の内部にある変化が生じたことが語られる。

> Something weird happened to me not long after the end of the Second World War. I wouldn't go so far as to say that I, a Japanese American, became Black, because that's a pretty melodramatic statement. But some kind of transformation did take place, the effects of which are with me still.[9]

この表現から「私」は，アフリカ系アメリカ人の立場から人種問題の深刻さを認識したと言える。また「私」は，白人の若者オーティスについても言及する。オーティスはアフリカ系アメリカ人ジャズバンドで活動し，その後，ロサンゼルスのワッツ地区の教会の牧師になった。彼もまた, “a place in his life from which there was no turning back”[9]に行き着いたが，しかしその人生は成功であったという。彼の人生が成功であったと「私」が語るのは，アフリカ系アメリカ人の中にあって, 白人の立場から反人種差別を明確に表明できるからだと推察される。

一方,「私」は, 白人はもとよりアフリカ系アメリカ人の立場からも明確に主張できず，結局は部外者の独り言のような立場にある。「私」は自身の人生については，成功と言えるかどうかわからないと言う。

> But I don't know whether mine is or not. Because when I realized that something was happening to me, I scrambled to backtrack for awhile. By then it was too late. I continued to look like the Nisei I was, with my height remaining at slightly over four feet ten, my hair straight, my vision myopic. Yet I know that this event transpired inside me; sometimes I see it as my inward self being burnt black in a certain fire.[9]

内部が焦げて真っ黒になるという表現は，アフリカ系アメリカ人に対する感情移入の深さであるとともに，人種差別に対してどうしても抗議できない「私」の激しい焦燥感の表れとも考えられる。

「私」は, ショート一家の死には自らにも責任があると感じる。また, アフリカ系アメリカ人差別に対して憤りつつも, 実際には全く無力である自己に落胆する。この責任感と無力感が抑圧となって,「私」は，アフリカ系アメリカ人週刊紙社を退職して東部の州に旅立つ。これに対して, James Kyung-Jin Leeは,「私」が新聞社を辞めて東部へ逃避することを，ヤマモトの政治的な問題からの撤退であると批判している[17]。しかし, 実際のヤマモトは，ニューヨークのカトリック・ワーカーへ向かう。そこでヤマモトは, 人種差別に対する批判の根底にある自らのhumanityを実践に移そうとする。ヤマモトは, ショート一家の死を境として, さらに自己に厳しい道を選択したのである。

ヤマモトは, 人種偏見に曝された日系アメリカ人二世の

心中で繰り広げられる複雑な葛藤を“Wilshire Bus”という作品においても描いている。この作品中, 二世のエスターは，復員軍人ホームに行く途中，同様にそこに行く東洋人夫妻とバスに乗り合わせる。挨拶代わりに彼女は東洋人の妻に微笑みかけるが，妻はこちらを見向きもしない。そのうち酔っぱらった白人男性が，中国人らしい夫妻に対して中国へ帰れと悪態をつく。エスターはつぶやく。

> . . . whether the man meant her in his exclusion order or whether she was identifiably Japanese. Of course, he was not sober enough to be interested in such fine distinctions, but it did matter, she decided, because she was Japanese, not Chinese, and therefore in the present case immune. (9)

さらにエスターは，白人男性が望ましくない者として中国人を名指したことに満足感をもつ。しかしエスターは我に返り，自分が満足感まで抱いたことに驚いて，罪の意識をもつ。

またエスターは, 日本人，中国人，朝鮮人という同じ東洋人同士の中にも差別意識や敵対心があることを思い出す。エスターは, アーカンソー州の強制収容所からロサンゼルスに戻って間もないころ,「私は朝鮮人です」というバッジをつけた男性を目撃し，激怒すると同時に侘しさを味わう。

> Heat suddenly rising to her throat, she had felt angry, then desolate and betrayed. True, reason had returned to ask whether she might not, under the circumstances, have worn such a button herself. She had heard rumors of I AM CHINESE buttons. So it was true then; why not I AM KOREAN buttons, too? Wryly, she wished for an I AM JAPANESE button. . . (9)

しかしながら，自分が抱いた人種偏見の道徳上のやましさを埋め合わせようとして，再びエスターはバスの隣の席の東洋人妻に微笑みかける。しかし彼女は，押し殺した感情とともによそよそしさを示しており，無表情の中にも敵意を見せていた。白人男性は，“So clear out, all of you, and remember to take every last one of your slant-eyed pickaninnies with you!” (9) と, 吐き捨てバスを降りる。その後，バスに同乗していた別の白人男性が，アメリカ人全員が差別意識をもっているわけではないと和解を求める。しかし，エスターは今までのやり取りの中に, 日系アメリカ人二世の自分も差別の対象になっていることを意識する。

バスは目的地に到着し，エスターと東洋人夫婦は家族を見舞いに復員軍人ホームへと向かう。エスターの心中には，酔っぱらっているときこそ，その人にもっともよく耳を傾けなければならないという言葉が何度も沸きあがり，ついには泣き出してしまう。

> . . . she [Esther Kuroiwa] was filled once again in her life with the infuriatingly helpless, insidiously sickening sensation of there being in the world nothing solid she could put her finger on, nothing solid she could come to grips with, nothing solid she could sink her teeth into, nothing solid. (9)

ヤマモトは, 人種偏見に関して日系アメリカ人二世が置かれている立場や，複雑な心境と繊細な感性を映し出す。ヤマモトの描く中心人物は，差別に対する恐怖と怒り, それに抵抗しなければならないという責任感を抱く。しかし, 実際には無力であり, 無意識のうちに他のマイノリティに対して，自らが被差別者になっていたことに落胆する。そして，ついには正体の掴めない不安に襲われる。

3．‘Fear of Responsibility’

1960年前後，ヤマモトは精神疾患を患う。そのときのことをヤマモトは次のように回想する。

> . . . unsettling events like death and illness fell thick and heavy there for awhile and I faltered, yearning, I guess, for a little more peace and order than it was at that time possible to have. Nervous breakdown is the popular term for it, anxiety the clinical name. The psychiatrist at Resthaven. . .said my illness stemmed from fear of responsibility.(13)

“My own background is also the basis for ‘Eucalyptus.’” (9) とヤマモトが述べているように，この精神の病は短編“Eucalyptus”に半自伝的に描かれている。この短編は1970年に書かれ，その20年後の1990年に出版される。この作品において, 中心人物のトキ・ゴンザレスは，精神的な病気のためにヒルトップ・ハウスへ入所する。この作品には施設で出会った医師，スタッフ，そして患者との交流が描かれる。医師はトキの病名は“anxiety” (9)であり，その病気の原因を‘fear of responsibility’であると診断する。しかし，作品中にこの‘fear of responsibility’の根底にあるものが何であるかとの答えは提示されていない。ヤマモトの‘fear of responsibility’のresponsibilityとは何に対しての責任なのかをここで考察してみたい。

“Eucalyptus”において, トキは治療を続ける中で，“If the Salt hath lost his savour, wherewith shall it be salted?” (9) という聖書の教えがようやく理解できるようになったと

いう。この聖書の教えは，マタイ5.13の地の塩，地の光に示されている。ヤマモトは“Writing”でカトリック・ワーカーについて，“the *Catholic Worker* . . . with its non-violence, voluntary poverty, love for the land, and attempt to put into practice the precepts of the Sermon on the Mount”[13]と説明している。山上の垂訓には，「義に飢え渇く人々は，幸いである…」[18]という記述がある。熟考の末，ヤマモトは山上の垂訓の教えを実行するためにカトリック・ワーカーへの参加を決心する。このことから，ヤマモトのresponsibility の対象は，キリスト教の「義」であると言えるであろう。

しかしながら，Kink-Kok CheungによるWakako Yamauchiとのジョイント・インタビューで, ヤマモトは自分の宗教について以下のように語る。

> I was brought up Buddhist . . . I was already in my thirties when I accepted the idea that Jesus Christ was the Son of God. That automatically makes me a Christian, right? But I don't reject any of that Buddhism . . .[19]

ヤマモトは 8 年間もカトリック・ワーカーの新聞を購読し続け，代表者とも会い，熟慮したうえで，カトリック・ワーカーに行くことを決断したという[1][19]。またヤマモトは，Cheungとの書簡によるインタビューで，自分はカトリック・ワーカーであるが,カトリックではない[13]と述べている。さらに，キリスト教無政府主義者であると次のように述べる。

> . . . I call myself a Christian anarchist . . . I'm a Christian because I believe that Jesus Christ is the Son of God. And an anarchist because I agree that 'the government is best which governs least,' the government by mutual consent in small groups—communities—is the ideal form of democracy.[13]

そして，ヤマモトはカトリック・ワーカーになることに対して，“I've come across one analysis that my choice was a natural outcome of the internment.”[13] と述べている。ヤマモトは聖書の山上の垂訓を実践しようとしているものの，明確にキリスト教徒を自認することに躊躇があり，地位，名声，体制，権威構造に対して懐疑的である。

ヤマモト作品の中には人種偏見に関して語る箇所が多くあるが，ヤマモトは白人の人種偏見だけでなく，日系人も含めたアジア系アメリカ人がもつ人種偏見，さらにはアフリカ系アメリカ人が白人にもつ偏見や白人に対するステレオタイプの糾弾にも批判的である。しかしながら，ヤマモトは戦闘的な表現を好まず，決してhumanityを大きく振りかざすことはしない。Cheungによると，“The Brown House”の中でヤマモトは，“overtly political statements that can be abstract and one-sided”を書くのではなく，“nuances and resonances”を心掛けて人種問題を描き出している[14]，という。

以上のことから, ヤマモトの「義」はむしろヤマモト固有のhumanityに根差したものであると言える。Cheungはヤマモトの作品について“Whether Yamamoto uses a Buddhist or a Christian frame of reference, her overriding tone is one of human questioning accompanied by understanding rather than of moral certainty coupled with religious complacency.”[14]と述べている。ヤマモトの筆致は，特定の宗教や道徳の枠にはまることなく，ひとりの悩める人間としての問いかけから発されるものである，とCheungは言う。つまり，白人側にもアフリカ系アメリカ人側にもそしてアジア系アメリカ人側にも偏ることのない深い共感が，ヤマモトの「義」の根底をなすものと考えられる。

むすび

ショート一家の死後,「私」はアフリカ系アメリカ人週刊紙社を去り，東部への旅に出る。ヤマモト自身も1953年からニューヨークのカトリック・ワーカーの活動に参加する。ヤマモトは山上の垂訓を模範とする自己の内省的な活動によって，人種差別問題に対する責任感と焦燥感に対抗しようと試みるが，この焦燥感は‘fear of responsibility’となり精神の病につながってゆく。このことから,‘fear of responsibility’は，“A Fire in Fontana”に描かれた人種差別問題が, ヤマモトの精神を崩壊させるほどの懊悩を意味している，と私は考える。

ヤマモトが人種差別問題に直面するとき，白人はもとよりアフリカ系アメリカ人，あるいは他のいかなる人種をも一方的に擁護するという態度を作品中に示すことはない。これは，アメリカという社会で日系アメリカ人として多様な人種と共生し，多岐にわたる読書と複数の言語習得への努力[13]によって得た, 異文化に対する理解によるものだと考えられる。自己に対する厳しい責任感からくる人種差別問題の重圧からいったん距離を置いて，それに耐えうる思想を確立しようと，ヤマモトはジャーナリストから小説家へ，そしてカトリック・ワーカーから再び小説家へと転身してゆく。ヤマモトはジャーナリストから小説家になったときのことを“the oppression and discrimination [faced by blacks] finally got to me, and the weight was just too much to bear. So after two, three years I left [the *Los Angeles Tribune*] . . . that's when I started writing the short stories. ”[19]と語る。この転身の背景には，ヤマモト固有のhumanityに基づく，人種差別という難問との格闘があったと考えられる。

ヤマモトが‘fear of responsibility’から自らを解放でき

たのは，‘fear of responsibility’を自身の問題として明確に認識できるようになってからである。それは，アフリカ系アメリカ人週刊紙社の職を去ってから何十年も経った後，つまり心療内科の病棟を退院して 2 ～ 3 年後のことであった[9]。“A Fire in Fontana”のエンディングで，「私」はテレビの画面に映し出されるワッツのアフリカ系アメリカ人による暴動をみて歓喜の涙を流す。「私」の喜びの率直な感情は，以前多くの場面でみられた「私」の葛藤や懊悩という感情とは全く性質の異なったものである。「私」の歓喜は，作者ヤマモトが精神の病から立ち直る過程において到達した，人種差別問題を完全に解決することは不可能であるという認識によるものではないだろうか。暴動を目撃したことが，代替体験となり，今まで抑圧されてきた感情や懊悩から，ついに「私」が解放されたと考えられるのである。

―文　献―

(1) 植木照代「日系アメリカ人の歴史と文学」植木照代，ゲイル・K・佐藤他編 『日系アメリカ文学 三世代の軌跡を読む』創元社 pp.v-xxiii，1997

(2) Sone, Monica. *Nisei Daughter*, Washington University Press, 1979

(3) Houston, Jeanne Wakatsuki, and James D. Houston. *Farewell to Manzannar*, Bantam Books, 1973

(4) Uchida, Yoshiko. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family*, Washington University Press, 1984

(5) Yamamoto, Traise. *Masking Selves, Making Subjects: Japanese American Women, Identity, and the Body*, California University Press, 1999

(6) Lim, Shirley Geok-lim. “Japanese American Women’s Life Stories: Maternality in Monica Sone’s *Nisei Daughter* and Joy Kogawa’s *Obasan*.” *Feminist Studies*, Vol.16, pp. 288-312, 1990

(7) Smith, Sidonie. *A Poetics of Women’s Autobiography*, Indiana University Press, 1987

(8) Yamamoto, Hisaye. “. . . I Still Carry It Around.” In King-Kok Cheung (ed.), *Seventeen Syllables / Hisaye Yamamoto*, Rutgers University Press, pp.69-70, 1994

(9) Yamamoto, Hisaye. *Seventeen Syllables and Other Stories*. Revised and Expanded Edition, Rutgers University Press, 2001

(10) 村山瑞穂「他者の記憶を語ること」吉田迪子編『他者・眼差し・語り―アメリカ文学再読』南雲堂フェニックス pp.208-305，2005

(11) Elliott, Matthew. “Sins of Omission: Hisaye Yamamoto’s Vision of History.” *MELUS*, Vol.34, pp. 47-68, 2009

(12) Cheung, King-Kok. “Interview with Hisaye Yamamoto, In King-Kok Cheung.” (ed.), *Seventeen Syllables / Hisaye Yamamoto*, Rutgers University Press, pp.71-86, 1994

(13) Yamamoto, Hisaye. “Writing.” In King-Kok Cheung. (ed.), *Seventeen Syllables / Hisaye Yamamoto*, Rutgers University Press, pp. 59-68, 1994

(14) Cheung, King-Kok. “Introduction.” *Seventeen Syllables and Other Stories*. Revised and Expanded Edition, Rutgers University Press, pp. ix-xxiii, 2001

(15) Winters, Yvor. *Dear Miss Yamamoto: The Letters of Yvor Winters to Hisaye Yamamoto*, In Robert L. Barth. (ed.), Fifth Season, 1999

(16) Melville, Herman. *Benito Cereno*, Bryant, pp. 182-257, 1855

(17) Lee, James Kyung-Jin. Urban Triage: *Race and the Fictions of Multiculturalism*, Minnesota University Press, 2004.

(18) 日本聖書協会 『新約聖書―和英対照―』三省堂印刷 2007

(19) Cheung, King-Kok. “Hisaye Yamamoto and Wakako Yamauchi, Interview by King-Kok Cheung.” In King-Kok Cheung. (ed.), *Words Matter: Conversations with Asian American Writers*, Hawaii University Press, pp. 343-382, 2000

―付　記―

本論はアジア系アメリカ文学研究会第96回例会(京都外国語大学，2011年 1 月29日) において発表したものを加筆修正したものである。

―謝　辞―

本研究は兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の連合大学院国際インターンシッププログラム(平成22年度)の助成を受けました。